

論文要旨

論文題目

古墳から見た甲斐の地域社会

氏名

小林健二

要旨

本論文は、古墳から見た甲斐（現在の山梨県）の地域社会についての研究である。

古墳時代の甲斐は、長年にわたる研究成果から、甲府盆地を一つの大きなまとまりとして捉えることができ、本論でも甲府盆地をフィールドとして3世紀から7世紀に至る時期を取り扱う。

まず、甲斐の古墳時代前期の土器様相として、甲府盆地で数多く出土している外来系土器のひとつであるS字状口縁台付甕の定着について検討を行い、東日本の中でも早い段階に波及しており、現在においても重要な画期であることを再確認した。そして、その変遷を基軸として東海系土器の波及と定着を中心に、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器様式に基づいた編年を提示し、古式土師器の成立を捉えた。また、東海系以外の外来系土器として北陸系土器・畿内系土器（叩き調整甕）についても取り上げ、甲斐の古墳時代前期土器様相の中に位置づけた。さらに、中期から後期、終末期にかけての土器編年を設定し、甲斐の古墳時代を通した時間軸を構築し、その上に墳墓の変遷を位置づけ、以下の各期古墳の諸相について検討を行った。

前期の甲斐は、甲府盆地南部の中道古墳群に3基の大型前方後円墳が相次いで営まれたことが明らかになっているが、中でも、それまで可能性として考えられていた甲斐天神山古墳の前期への遡上が発掘調査により確定したことは大きな成果であり、出土土器から当該地域最古の前方後円墳であることを確認した。また、古くから学界で知られている大丸山古墳については、「特異な主体部構造」について検討を行い、従来とは異なることを指摘した。そして、前期では東日本最大級の規模を誇り、最も発掘調査が進んでいる甲斐銚子古墳について、出土品を中心にその成果を再検討することにより、出現の背景と交通路を介した東日本の中での甲斐の先進性、これらが営まれた歴史的意義について考察した。

中期では、隆盛を見せた前期から一変し大型前方後円墳がなくなり、中・小規模の墳墓が数多く築かれる時代へと移るが、この背景には弥生時代以来の甲府盆地の伝統的な墓制である周溝墓の存在が大きく関わっていると考え、大型方墳である竜塚古墳については、伝統的方形墳墓の復権として出現した可能性を検討した。

後期では、横穴式石室の導入について、まず積石塚をはじめ小規模な古墳へ無袖石室が導入され、後期・終末期にかけて各古墳群の中で変遷することが明らかにした上で、やがて有袖の大型横穴式石室を持つ古墳が甲府盆地東西に出現する中で、無袖石室の構造や系譜、階層性について検討した。また、甲斐の古墳時代において重要な存在である積石塚について、渡来人・馬との関わりとともに他地域と比較し、研究の現状からも他地域より後出的であることを指摘した。

最後に、甲斐の終末期古墳の様相を概観した上で、後期・終末期古墳から出土する律令制成立期（7世紀末～8世紀前葉）の土器に注目し、律令支配の整備拡大とともにこれらの土器が甲府盆地へ波及し、甲府盆地内各古墳群において共通して見られることは、新しい社会への移行を示しているものであり、当該地域における古墳の終焉であると考えた。

上記の内容は、現在の視点から見れば甲斐の古墳時代史の再検討とでもいうべきものであるが、甲斐の古墳時代社会が多様な在り方をしていたことを、発掘調査の成果から明らかにすることが目的である。